

食糧支援で学生を応援！まんぷくプロジェクト@高崎

コロナで大学生生活が危機！

「学費は変わらないのにバイトのシフトと収入は激減」「収入が減り生活に困っている」……この悲鳴のような声の主は、食糧支援を行う「まんぷくプロジェクト」に集まった群馬の大学生たちです。コロナ禍により全国のあちこちで展開されるようになった食糧支援ですが、行政の支援がなかなか届きにくい大学生を対象とした「まんぷくプロジェクト」が群馬・高崎でも実施され、今回で8回目となりました。そこで、このプロジェクトについて詳しく探ってみました。

「仕送りなし 45%」の衝撃

取材に応じてくださったのはこのプロジェクトを主催する「まんぷくプロジェクト実行委員会」の大澤綾子さん。翌日に実施を控えた2021年12月14日、多忙な準備作業を差し繰って、これまでの内容について説明してくださいました。

報道などでも度々取り上げられる通り、若者を取り巻く状況の先が見えない中で、広く市民に食材の提供やカンパの協力を呼びかけ、「食糧支援で学生を応援！」するため立ち上げられたのがこの「まんぷくプロジェクト」だそうです。今までに計7回、高崎経済大学正門前の「バスクルこぼな」にて実施され、延べ900人余の学生が支援を受けたとのこと。寄せられた食材は、お米やさま



ざまな野菜の他、乾麺、レトルト食品、納豆、缶詰、調味料など。食品以外にティッシュやマスク、トイレットペーパー、生理用品なども用意されます。これらを準備・仕分けし配布するのは、地元上並榎町有志の方々や、青年、女性、農業、貧困対策に取り組む団体等で構成されている「まんぷくプロジェクト実行委員会」のメンバーです。このようなプロジェクトが多くの人々の善意と協力で支えられている現状は、「心温まる情景」として捉えられがちですが、生活支援を必要とする人へ行政の支援が充分届いていないことも示しています。

今までに食糧配布の際に大学生に記入してもらったアンケートによると、「仕送りはありますか？」との問いに「なし」と答える学生が45%いることが分かりました。これまでに支援を受けた学生による回答とはいえ、この結果は、大学生の親世代の経済状況を暗示するものともいえます。他に、「奨学金を借りていますか？」との問いに「借りている」と答えた人が40%。「バイト収入が減った」と答えた人が34%。「バイトシフト減の補償なし」が75%などと、いずれも大学生のお金に関する状況がコロナを機に悪化していることを示しています。

「学費が高い！」「寂しい」

この他にアンケートでは、今の学生生活が

コロナによって危機にあることをうかがわせる記述が多く見られます。

「学費を減らしてほしい」「学費が高い」

「授業料を安くしてほしい」など、大学に支払う学費に関する記述は、支払い当事者が親ではなく学生本人の場合もあることをうかがわせます。また、「バイト量の減少」「バイト先の閉店」「バイトシフトに入れない」「お金がない」「休業補償がない」など、想定していたバイト収入の減少に関する記述も多く、「食費がかさむ」「レジュメのコピー代かさむ」「施設が使えないことへのサポートがない」「オンライン授業がしんどい」「Wi-fiのデータ利用が増えてすぐ速度制限がかかってしまう」など、コロナ下での生活全般にわたる多様な窮状を訴える声があふれています。

そして、「就活のコロナの影響が心配」「人に会えない」「家でひとりで寂しい」など、現状と未来に不安を感じ、ひとりで思い悩む大学生の姿が浮き彫りになりました。



「就活が思うようにいかない！」

12月15日午後3時から高経大正門前の「バスクルこばな」(バス乗降所)で食糧配布が始まりましたが、この30分ほど前から学生たちの列ができました。そこで、並んでいる大学生数名に最近の学生生活について話を聞きました。「現在、通常授業が4割、分散(学生を分割、複数教室で開講)が4割、オンラインが2割程度。これが普通になりつつある」「バイトをできないのが想定外。正直、困っている」「一年なので、コロナ前がどうだったか不明」「入試の時は、あれこれ焦った」



「サークルは通常通り、そのために来ているようなもの」「この前、なんとか都内の会社に内定をもらった」「卒論の締め切りが近いので、焦っている」「就活が思うようにできないのが不安」「サークルは楽しいが、授業は……」「最近やっと友達が出来た」「食糧支援はありがたいが、いつもあるわけではない」……。大学生といえども生活者としての苦労を漂わせるコメントもあり、身につまされる思いで話を聞きました。

支援する側にまわろうとする学生の姿に未来を託したい

「公助」を進めるべき為政者がことさら「自助」を勧める光景を私たちはまだ鮮明に記憶しています。このような責任転嫁もしくは回避が常態化している日本社会で、困っている人の声に直接耳を傾けることは何よりも重要です。今回のプロジェクトに「受付」で参加していた二人の大学生は「今まで支援を受けていたので、何か支援できることをしたかった」と今回参加した理由を語ってくれました。

このような思いが、困っている人を助け未来の社会を形作って行くことを願わずにはいられませんでした。

